はじめに

入試の現代文で問われていることは、**「言語としての日本語」**です。いいかえれば、**「書いてあることを書いてある通りに理解すること」**です。しかしながら、「書いてあることを書いてある通りに理解すること」は、ふつうに考えられているほど受動的で消極的な行為ではありません。むしろ、テクスト（文脈）以前の先入観や自分勝手な解釈を排して、文脈の中で著者の見解を正しく追うという**能動的で積極的な知的行為**なのです。いいかえれば、現代文には、指導を受けて獲得するべき**「読み方」「方法」**があるということです。

しかも、その「読み方」「方法」は**論説文にも小説・物語文にも共通**したきわめて一貫したものです。それは**「対比の発見と追跡」という方法**です。くわしくは、授業で展開されます。ともあれ、ここで強調したいことは、みなさんが受講しようとしているこの現代文授業は、**「方法の現代文」**だということです。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルをみる　↓　テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくに共通テスト現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわる**ことが多い）。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

3　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。

4　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

記述式問題解答へのガイドライン

1　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a　［　｜人｜間｜は｜…］→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b　［…｜…｜…｜こ｜と］→　※**句点なし！**（1点減点）

設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則

ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c　［…｜…｜…｜こ｜と。］→　※**句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（ＡではなくＢである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意

……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性
一文・文 ⇒ 心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

予習の仕方……必ず予習しましょう。映像講義を視聴しているだけでは、解答力は身に付きません。その上で、以下のようなプランが考えられますが、プランCをオススメします。

プランA……映像授業を見る前にまず、自力で解答する
プランB……映像のチャプター1（タイトルと設問条件解説・最終段落先取り読み）まで見てから映像を止めて、解答する
プランC……第三講までプランBで、解法の手順をしっかり学んだ後、第四講からプランA
プランD……現代文があまり得意ではない方は、第四講以降、AとBを交互に繰り返す。例えば、偶数の講義ではプランA、奇数の講義ではプランBというように

予習の時間＝問題にアタックする演習時間

各講二〇分が基本です（ただし、第一講はその1が八分、その2が十二分、なお国公立大学など記述問題を含む講では二十五分が基本となります）。その他、以下のようなアレンジも可能です。パターンCがオススメです。

パターンA……右の基本時間通り
パターンB……時間設定にとらわれず、納得いくまで解答する
パターンC……基本時間通りで解答する講と、じっくり納得いくまで解答する講を交互に繰り返す。時間設定を気にするあまり、読み方や解法が雑になっては元も子もありません。かといって悠長に構えすぎてもダメ。本来入試は時間限定付きですから。そこで、じっくり解く回と本番を想定した回を交互に組み合わせましょう。

目標得点　……配点はしてありませんから、その講義ごとに、全何題中いくつできたのか、という得点率（例えば第三講なら全部で十三題）

○私大………………（第一講その1・三講・四講・七講・八講・九講・十三講・十四講・十七講・十八講・十九講・二〇講・二十三講・二十四講）→**六十五％以上**
○国公立大…………（第六講・十一講・十六講・二十一講）→**五十五％以上**
○共通テスト（マーク式問題に相当）……（第一講その2・二講・五講・十講・十二講・十五講・二十二講）→**八〇％以上**
○復習問題…………**八〇％以上**

復習の仕方について

予習と授業が柱ですが、復習するなら……

設問をもう一度解き直すというタイプの復習はオススメできません。勉強したような気になるだけで、発展的な学習とは言えない。文章を読み物として再読することはオススメです。なんたって良質な文章、各テーマのモデルのような文章を集めていますから。ただし、設問については授業内で疑問を解決しましょう。また解説テキストでも確認できます。一方で、現代文入試問題での読解力・解答力を向上させるためには、同じ問題を解き直すのではなく、授業をモデルとして、問題集などで新しい問題に次々チャレンジしていきましょう。その文章・設問も対比で読める・解けるようにする訓練を続けることが有効です。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『はじめての共通テスト対策　国語』エデュケーショナルネットワーク編（Ｚ会）……試行調査２回分＋オリジナル２回分から成り、古文や漢文も含みます。マークシートや記述解答用紙も付属。
『ハイスコア！共通テスト攻略　国語　現代文』Ｚ会編集部（Ｚ会）……〈参考書＋問題集〉、〈マーク式＋記述式〉、〈センターの過去問題＋試行試験問題＋オリジナル〉など、それぞれの要素を盛り込んでいます。現代文のみです。
『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『入試精選問題集７　現代文』（河合出版）……難関私大および国公立大二次向け

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

教材選定について

- 有名難関大学の過去問の中から良問をセレクト
- 各テーマ（日本文化論・科学論・歴史論など）の読書資料になる価値の高い文章をセレクト
- それぞれの学問界を代表する筆者の文章をセレクト
- 奇問は外し、入試現代文のモデルとなる設問をセレクト。アタックすることを通じて解答力を高められる設問ばかり。

目次

第十三講　弁証法……p. 10
第十四講　文学論・演劇論……p. 15
第十五講　小説その４　現代と回想……p. 21
第十六講　コミュニケーション論……p. 28
第十七講　身体論・芸術論……p. 33
第十八講　文学論　カルチュラル・スタディーズ……p. 38
第十九講　学問論その２……p. 44
第二十講　日本文化論・音楽論……p. 50
第二十一講　歴史論その２……p. 56
第二十二講　小説その５　大能力と小能力……p. 60
第二十三講　日本語論・翻訳語論……p. 69
第二十四講　情報化社会論その２……p. 75

第十三講　弁証法

論理を尊ぶ風は西洋伝来である。十九世紀のヨーロッパは科学的で、たたいてもこわれないロジックという新しいおもちゃに夢中になっていたらしい。今世紀になって、不調和の美しさなどということが言われ出したのは、その反動であろうか。純一に対して複雑が新しい価値として登場した。社会的歴史的現象の説明として、複数の傾向の交叉（こうさ）・交流という流動の概念が生まれる。音楽の不協和音への関心も高まり、不調和の調和の考えが一般にも訴えるところをもつようになった。

文学上でいうと、一語一義的考えに対して、各語が同時に多義的であることが強調されるに至った結果、表現の晦渋（かいじゅう）、曖昧など、従来は消極的に考えられて来たものが、積極的に肯定される美学が生まれたのである。総じて、非合理への再認識であった。

しかし、こういう超論理への開眼は一日にして行なわれたものではなかったにちがいない。不調和の調和は、すでに、正と反とが止揚されて合になるという弁証法において、成立している。正と反とは矛盾対立の関係にある。両者を同一平面に止めておけば、プラス・マイナス・ゼロの無為の中和を起こす。これを別の次元で統合するのが止揚にほかならない。［A］を弁証法的に説明すれば、止揚された［B］ということになる。

形式論理の上ではともかく、日常生活においては、不調和の調和の価値は直観的にとらえられている。ことばのおもしろさが、大なり小なり、この統合された矛盾を含んでいるのは注目すべきである。

ことばの矛盾の積極的意義を認めているもののうちで原型をなしていると考えられるのが、修辞学で撞着（どうちゃく）語法と呼ばれているものである。

［C］とか［D］とかいうようなのが撞着語法であるが、矛盾概念が表面にはっきり出ていることによって、独自のおもしろさが感じられる。正攻法の論理の手のとどく警句的真理がこうした形式で表現できるのは興味深い。

ごく古くから撞着語法のような言い方があったことを考えると、人間は、元来、決して矛盾を怖（おそ）れたり、嫌ったりするものでないことがわかる。

不調和の調和は、自然にそうなるのではなくて、違和のものに力を加えて無理に融合させるのである。一見その融和は中和に似ているが、実際はそれとはまるでちがった大きなエネルギーが秘められている。

悪い矛盾が［Ｅ］相殺（そうさい）の論理であるとするなら、価値のある矛盾は止揚された［Ｆ］統合である。［Ｇ］矛盾のように反発し合うものをただ中和させてしまうのではなく、［Ｈ］矛盾は、対立するものを掛け合わせて、思いもかけない大きな［Ｉ］可能性をつくり上げる。矛盾の中には、こういう［Ｊ］ともいうべきものがあることを、とくにわれわれは、忘れないようにしておかなくてはならない。

よく日本人は論理に弱いと言う。日本人の思考は矛盾だらけだとも言う。そして、そういうことをいちばん信用しているのは日本人自身である。もちろん、われわれの回りには悪い矛盾もずいぶんあるし、それを警戒するのに怠惰であってはならないが、日本文化に固有な論理には一顧（いっこ）も与えないでおいて、外国のロジックに合わないからと言って、非論理的だといって恐縮しているのは、あまり感心したことではない。

思考方法をポジティヴなものとネガティヴなものと分けると、日本人の思考はネガティヴな形式をとることが多い。はじめから正を正として描くのではなく、負と負の相乗によってポジティヴな世界をあらわす方法を好む。その結果が、一見して矛盾のように思われる形を借りてくることがすくなくない。しかし、それを消極や矛盾と見るのは皮相（ひそう）であって、実は、しばしばたくましい創造なのである。

（外山滋比古『省略の文学』）

問１　空欄Ａ・Ｂに入れるのにもっとも適当な組み合わせを左の中から選べ。

①　Ａ　中和　Ｂ　調和
②　Ａ　中和　Ｂ　矛盾
③　Ａ　調和　Ｂ　中和
④　Ａ　調和　Ｂ　矛盾
⑤　Ａ　矛盾　Ｂ　中和
⑥　Ａ　矛盾　Ｂ　調和

問２　空欄Ｃ・Ｄに入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から二つ選べ。

①　あつものに懲(こ)りてなますを吹く　②　有難迷惑　③　石橋をたたいて渡る
④　公然の秘密　⑤　大は小をかねる　⑥　恥の上ぬり

問３　空欄Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊに入れるのにもっとも適当と思うものを左の中から選べ。（なお、Ｅ・Ｇ、Ｆ・Ｈにはそれぞれ同一のものが入る）

①　相乗的　②　創造的　③　平面的　④　立体的

問４　本文の第五段落（「形式論理の……」）から第八段落（「ごく古くから……」）までの中、故意に誤記された箇所がある。例にならって書き直せ。

例　論理を卑(いや)しむ　↓　論理を尊ぶ

問５　本文中の次の語句の中、本文全体の趣意からして、肯定的(ポジティヴ)な意味合いで用いられているものと否定的(ネガティヴ)な意味合いで用いられているものとがある。後者を二つ挙げよ。

①　新しいおもちゃ　②　音楽の不協和音　③　非合理
④　超論理　⑤　形式論理　⑥　撞着語法

第十三講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●外山滋比古＝とやま　しげひこ（一九二三〜）→英文学者・言語学者。
　著書である『思考の整理学』は東大京大生協で一位の売り上げ

語句

皮相＝ひそう→うすっぺらな表層
撞着＝どうちゃく→矛盾　二律背反　自己撞着　自家撞着
直観＝ちょっかん→いっきに本質や全体を把握する・イントゥイション
　cf直感→ひらめき・勘・第六感・インスピレーション
警句＝けいく→短くて核心をつくことば・アフォリズム・箴言（しんげん）・格言
修辞学＝しゅうじがく→レトリック／論理（ロジック）が形式的な一貫性や矛盾のないことを重視するのに対し、レトリックでは効果や印象付けを重視し、さまざまな表現技法を考える
弁証法＝べんしょうほう→対話を通してより高度な意見を生み出す思考法・ディアレクティーク
演繹法＝えんえきほう→大きな原理原則から発想して、個別事例の説明を行う思考法・数学的方法・ディダクション
帰納法＝きのうほう→多くの個別事例から発想して、原則を導き出す思考法・実証科学、実験科学の方法・インダクション

復習問題　第十三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア)これは社会的歴史的なゲンショウだ	①象	②像	③症	④証	⑤床
(イ)対立やムジュンを弁証法的に乗り越える	①純	②準	③盾	④巡	⑤殉
(ウ)異なる意見の対立を弁証法的にシヨウする	①使	②仕	③試	④私	⑤止
(エ)自己卑下は、カンシンできないね	①寒	②歓	③感	④関	⑤観
(オ)互いの意見を否定し合ってソウサイする	①債	②殺	③再	④蔡	⑤災
(カ)少しの配慮もなくイッコも与えない	①個	②子	③雇	④考	⑤顧
(キ)異質なもの同士のソウジョウ効果	①剰	②情	③場	④乗	⑤醸
(ク)しっくり合わずイワ感が残る	①違	②異	③緯	④畏	⑤意
(ケ)物事への取り組みがショウキョク的だ	①小	②症	③消	④少	⑤将
(コ)表面しか見ないヒソウ的見解	①層	②愴	③装	④相	⑤壮

テキスト解答・解説

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。**キーワードのグループ分け**失敗の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け**失敗。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り** ……本文中では、「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り** ……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし** ……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り** ……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り** ……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り** ……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

第十三講　弁証法

《本文の対比構造》

主役

創造的な弁証法

＝不調和の調和・不協和音・多義的・非合理の再認識・超論理・撞着語法・警句的真理・立体的・日本文化の固有な論理

主な対比

敵役

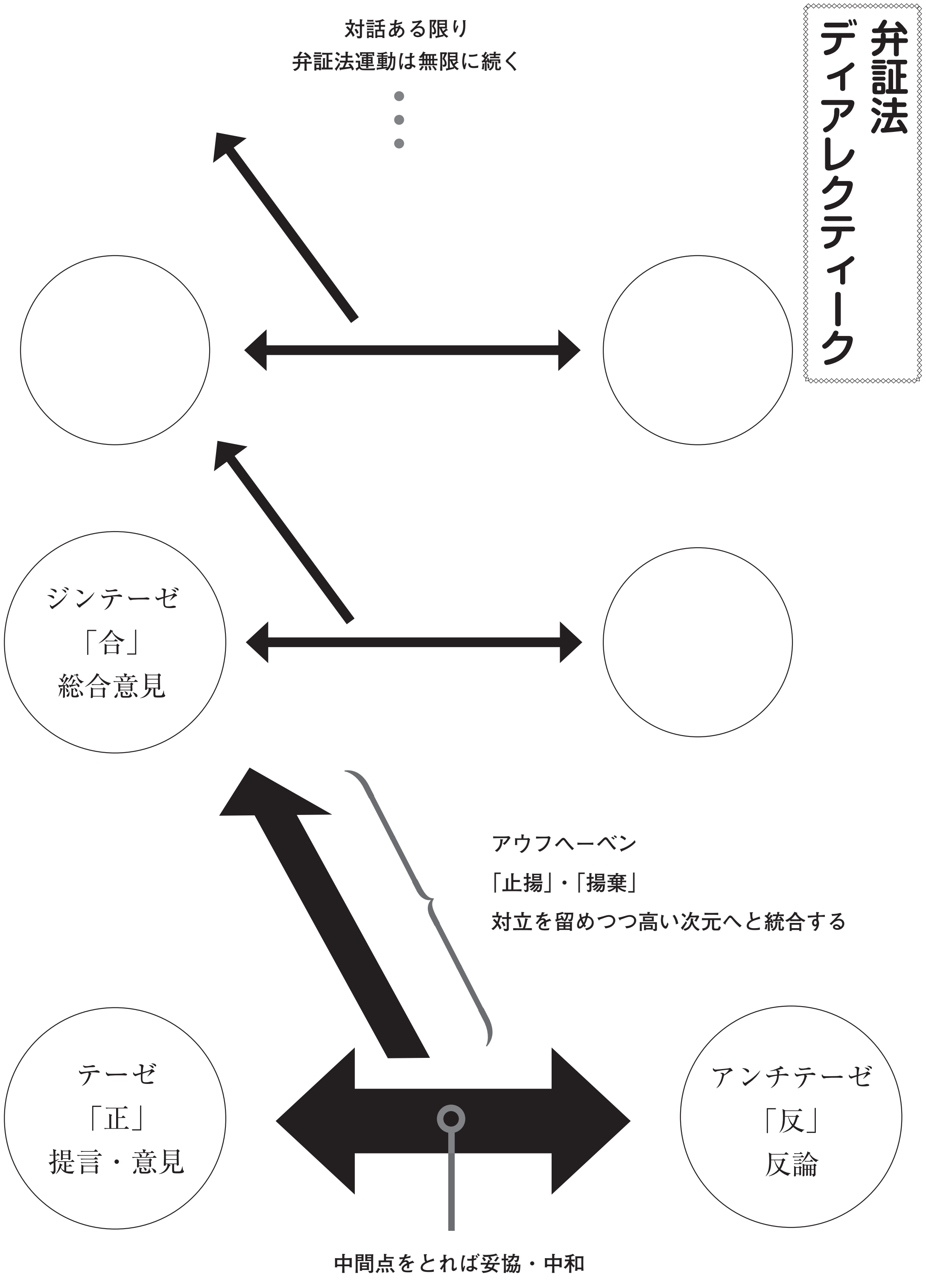
十九世紀のヨーロッパ

＝論理・科学的思考・ロジック・新しいおもちゃ・一語一義的考え・形式論理・正攻法の論理

小さな対比

脇役

無為の中和・平面的・悪い矛盾・相殺の論理


弁証法
ディアレクティーク
対話ある限り
弁証法運動は無限に続く
ジンテーゼ
「合」
総合意見
アウフヘーベン
「止揚」・「揚棄」
対立を留めつつ高い次元へと統合する
テーゼ
「正」
提言・意見
アンチテーゼ
「反」
反論
中間点をとれば妥協・中和

《解説》

問１《空欄補充・選択肢》

　まず、ＡＢともに筆者側、つまり弁証法の説明になります。したがって悪い矛盾を指す「中和」を含む①②③⑤はすべて対比混乱の誤りです。その上で［Ａ］は「不調和の調和」を弁証法ということばを使って説明するという文脈にありますから「調和」と決まります。また「止揚された［Ｂ］」は次の段落の「この統合された矛盾」で言い換えられていますから、「矛盾」と決まります。したがって④が正解。

問２《空欄補充・選択肢》

　矛盾＝撞着を含みながらことわざとして意味があるものは②と④です。①は熱々の料理を食べたやけどの経験から反省して冷たい料理もフーフー冷まして食べるということで、順接です。過剰反応とはいえ、矛盾ではなく正攻法の論理です。③も心配や慎重さのあまりということで矛盾ではありません。⑤も正攻法の論理ですよね。「小は大をかねる」なら矛盾で、ビックリですけど。⑥は「泣きっ面に蜂」「二度あることは三度ある」と同じ、足し算の理屈ですから少しも矛盾を含みません。

問３《空欄補充・選択肢》

　ＥＧは悪い矛盾で、第四段落にもあるように「同一平面」にとどまる「無為の中和」です。③の「平面的」が入ります。ＦＨはその正確な対比ですから④の「立体的」が入ります。Ｉは直前の「掛け合わせて」の言い換えですから①「相乗的」と決まります。Ｊはこの段落のまとめであり、また本文全体のまとめにも当たります。最終段落にもあるように「負と負の相乗によってポジティヴ」「たくましい創造」がヒントで②「創造的」と決まります。

問４《誤記の指摘》

　本文中の意図的な誤記に気づくには、対比で読むという方法がなにより有効です。第七段落は、撞着語法という矛盾を含んだ独自のおもしろさを語っている箇所ですが、「正攻法の論理の手のとどく警句的真理」では、対比混乱の誤りですね。ここ

を修正するわけです。

問５《主題理解・選択肢》

あえて敵役を挙げなさいという問いです。設問条件自体が、文章を対比にもとづき、主役メッセージと敵役メッセージを分類して読みなさいよと言っているわけです。②③④⑥はすべて筆者側・主役メッセージです。①⑤が敵役のヨーロッパ合理主義の側です。

模範解答

問１＝④　問２＝②④（順不同）　問３　EG＝③　FH＝④　I＝①　J＝②

問４＝手のとどく→手のとどかない　問５＝①⑤（順不同）

復習問題解答

復習問題解答　第十三講

（ア）①　（イ）③　（ウ）⑤　（エ）③　（オ）②
（カ）⑤　（キ）④　（ク）①　（ケ）③　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）現象　（イ）矛盾　（ウ）止揚　（エ）感心　（オ）相殺
（カ）一顧　（キ）相乗　（ク）違和　（ケ）消極　（コ）皮相